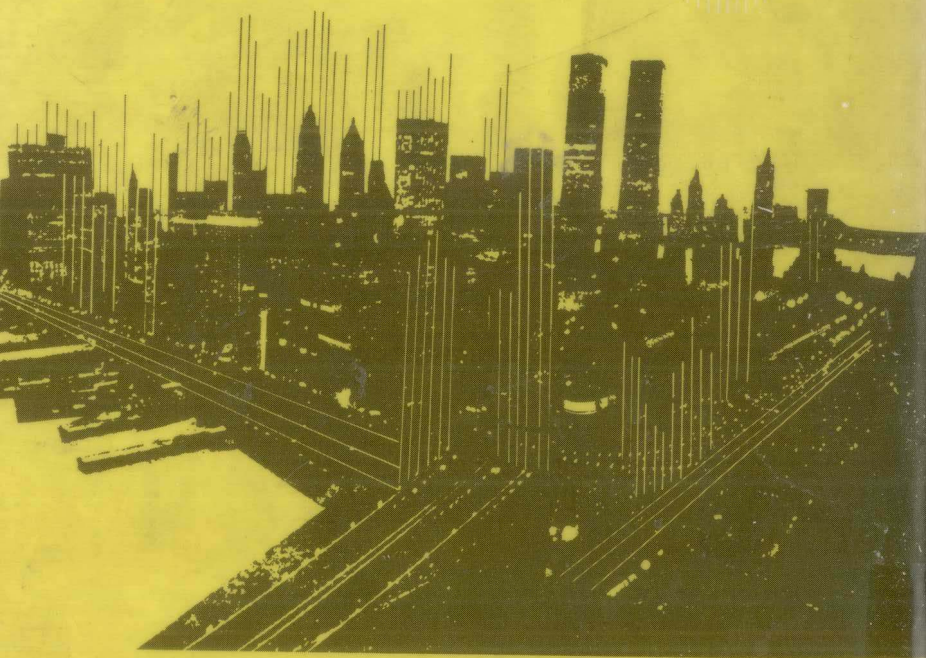


真昼の ワンマン・オフィス

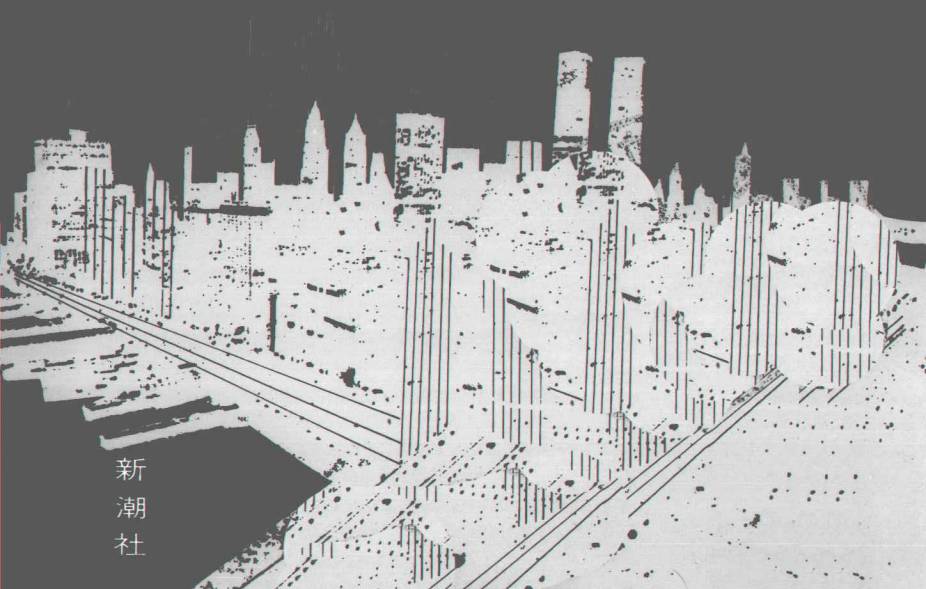
城山三郎



山三郎

昼のワンマン・オフィス

新潮社



真昼^{まひる}のワンマン・オフィス

昭和四十九年五月五日 印刷
昭和四十九年五月十日 発行

著者 城山^{しろやま}三郎^{さぶらう}

発行者 佐藤^{さとう}亮一^{りやういち}

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 東京(三)二六〇一・二二

振替東京八〇八

印刷 株式会社金羊社
製本 神田加藤製本

定価七五〇円

(落丁本はお取替えいたします)

真昼のワンマン・オフィス・目次

落日の丘に ・ ロサンゼルス 5

樹海はるかに ・ シアトル 37

大峡谷の男 ・ グランド・キャニオン 71

汀みぎわを行く男 ・ ニューオーリンズ 101

黒人地区ゲットのはずれ ・ シカゴ 131

セントルイスの男 ・ カンサス 173

金門橋に死す ・ サンフランシスコ 209

ミルクコーヒーの男 ・ サンディエゴ 239

ブロードウェイ百三丁目 ・ ニューヨーク 263

真昼のワンマン・オフィス

落日の丘に・ロサンゼルス

覚悟はしていたが、新任の支店長森戸に、まず空港で出迎えのとき、幸村は一発ぶちかまされた。

ロサンゼルス国際空港の日航到着ロビー。税関ゲイトから出てくる長身の森戸を、幸村夫婦が目ざとく見つけ、小腰をかめながら会釈すると、森戸もおうように片手をあげ、大腿に近づいてきた。

そこまではよかったが、森戸は幸村夫婦と形だけの握手をすると、視線をまわりに向け、露骨に不満の色を見せていった。

「だれも迎えにきていないのか」

「わたしたちが……」

「きみらのことじゃない」

「幸村夫婦など、はじめから員数外だ」といわんばかりの口吻であつた。

幸村は次の言葉が出なかった。腹も立ったが、それ以上に、へこれは厄介な上役がきたと、

鼻じろむ思いがした。

もともとアメリカでは、空港での送迎などということはない。戦後早くアメリカに留学し、いまも英語で寝言をいうというほどの伝説の持主の森戸が、そうしたアメリカの風習を知らぬはずがない。

それに、幸村たちのQ商事ロサンゼルス支店は、現地従業員を入れても総勢五人という小さな世帯。支店次長である幸村が細君同伴で出迎えていれば、それで十分のはずと思えた。

幸村は、森戸の光る眼鏡を見上げ、いいわけするようにいった。

「いま加藤君はフェニックスへ行ってますし、中野君はサンディエゴへ出張中で……」

「取引先はどうなんだ」

幸村は、〈ここは日本ではありませんよ〉と答えたいのをこらえ、

「中には、支店長の到着日時をきいてきたところもありましたが、ぼやかしておきました」

「なぜだ。来させりゃいいじゃないか」

「それが、アロン農園とか、ハリファックス商事とか、みんな問題のあるところばかりなので」前任の大久保支店長が逃げ廻っていた相手であり、その対決のための切札として、森戸が派遣された形でもあった。

「ここで哀願されたり、トラブルでも起されては、到着早々、不愉快な思いをさせることになると思います」

「不愉快な思いをするかどうかは、おれのことだ。きみなんかが、考えることではない」

森戸は頭ごなしにいった。幸村の隣りで、妻の小夜子がちぢみ上っている。

「おれは大久保君なんかとちがって、神経衰弱で胃潰瘍（かよく）になるなんて具合にはできていない。とにかくバリバリやるから、きみらも、そのつもりで」

幸村といっしょに、小夜子もつられてうなずいた。うなずかざるを得ない見幕であった。

ターミナル・ビルを出るとき、また一悶着あった。

広い駐車場から、幸村がフォード・カプリを廻してくると、森戸は突っ立ったまま車を見下ろし、
「なんだ、きみの運転なのか」

「はい」

「運転手は居ないのか」

幸村は腹が立った。

アメリカで運転手づきの自家用車を使えるのは、超巨大企業の社長か、億万長者など、ごくひとにぎりの人数でしかない。森戸自身それを承知しているはずなのに、何を無理なことをいうのかと思った。

「運転手が居なければ、だれか若い者にさせればいいじゃないか」

これも無理な注文である。

日本人社員はみな出張中だし、アメリカ人社員は運転手の代用をつとめることをきらう。

森戸は、ようやく大きな尻を後ろの席に放り出すようにして坐った。

「これじゃまるで、きみら夫婦の世話になりきた恰好だな」

とげのあるいい方であった。へ出迎え方がまちがっている。海外旅行にきた知人を扱うような迎え方をするな」と、叱っていた。

幸村は、小夜子が助手席に滑りこむのを待ち、無言のまま、車をスタートさせた。

へ小さなQ商事としては、支店次長夫婦で出迎えること以上の迎え方が考えられない」と、答えたところであった。

「こんなことなら、おれ用の車を一台持ってきてきておいてくれるとよかった。自分で運転して行っ

たのに」

これもまた、できない相談であつた。

いづれ支店長用に一台買うとしても、車には好みがある。勝手に用意しておくわけには行かぬし、それかといつて、レンタカーでは気に入るまい。

一通りばやき終つた森戸は、葉巻を切ると、火をつけた。強いにおいが、車の中に漂い出す。葉巻のにおいを嗅ぐと頭の痛くなるはずの小夜子だが、しかし、おびえたように窓を開こうともしない。

「厄介な支店長がきた」と、幸村はあらためて思った。

森戸の雷名というか、うわさはいろいろきいていたが、親しく仕えるのは、はじめての経験であつた。

中堅商社であるQ商事では、国立の一流大学とアメリカの大学の二つを出ている森戸は、早くから社内では皇太子視^{プリンス}されていた。

人使いが荒い半面、部下を自宅のパーティに呼んだりして、アメとムチとを露骨に使い分ける。商法もドライだが、それが当って、担当した部署では、いつも業績が躍進した。今度、難問のロサンゼルス支店長を無事つとめ上げたなら、まだ四十になるかならぬ中に、役員に加わることを確実という観測であつた。

大物であつたし、当人も大物を意識していた。いや、大物意識のかたまりであつた。

そのことを、到着早々、いやというほど思い知らされた形であつた。

幸村は、黙々と車を走らせた。はるか、サンタモニカ湾が、陽光に青くきらめいていた。風のせいか、名物のスモッグもなく、ロサンゼルス空は、うすいエメラルド色に高かつた。

ふいに、森戸が小夜子の背に浴びせかけた。

「奥さん、お子さんたちは元気ですか。たしか小学六年のお嬢さんと、二年の坊ちゃんでしたね」

「はい！」

小夜子はびっくりし、フロントグラスに頭を打ちつけんばかりにうなずいた。

森戸は、そうした小夜子をさらにおどろかせた。

「お嬢さんは、絵が上手だそうですね」

「いえ、そんなこと……」

小夜子はまるで求婚でもされたように、頬をあからめ、体をかたくした。それまでは畏怖のため身をちぢめていたのが、今度は感激で小さくなっている。

幸村は、やられたと思った。

赴任に先立って、森戸は部下の家庭事情まで人事課あたりで調べてきたのであろうが、それにしても、娘の絵のうまいことまで知っているとはいへない。

人心収攬術しゅうらんじゆつと思いながらも、幸村は舌を巻いた。

「絵は国境を越えて通用します。それに、こちらは日本とちがってカラフルだし、風景もスケールが大きい。せいぜい写生などに連れ出して上げるんですな」

森戸は、葉巻の煙を吐き出しながら続けた。その藤色の煙幕の中で、小夜子がうつとした顔でうなずいていた。

かなり混んできたフリーウェイを、幸村はダウントOWNめがけ、車を走らせ続けた。

森戸の声が、今度は幸村の背に向ってきた。

「絵といえは、堀社長の息子の文彦君が、こちらでヒッピー仲間に入って、絵をいたずらしてる

というじゃないか」

「このごろでは、かなり真剣に勉強されてるようです」

「経済学部を出て、経営の勉強に留学してきているというのに、仕様のない男だな。社長も嘆いておられた。おやじはえらいのに、どうして、ああいうくだらぬ息子が出るんだらう」

別に問われたわけでもないのに、幸村はハンドルをにぎったまま、自分の意見をいった。

「おやじさんがえら過ぎるから、文彦さんのような人ができるのではないでしょうか」

「どういう意味だね」

「何をやっても、えら過ぎる父親と比較される。これは、息子としてたまらないことですよ。現に文彦さんは、『おれは息子のために、くだらぬ父親になってやる』などといっておられましたからね。わたしにも、その気持が少しはわかる気がします」

「ふん」

森戸は鼻を鳴らし、

「とにかくヒッピーとか、ふうてんとか、人間の屑くずだ。そんな中に居ては、一人前の口をきく資格はない」

「しかし、文彦さんは、麻薬ドラッグをやっている様子でなし、フリーセックスの連中とつき合ってるわけでもありません。ただ自由な生活を求め、そして、絵心の赴おもむくままにという生き方なんです」

「本気で絵をやるつもりなら、パリかニューヨークで修行すればいいんだ」

「だが、文彦さんにいわせれば、パリにもニューヨークにも、えらい画家が多勢集まりすぎていて圧倒される。描く場が残っていないという気がするんだそうです」

「それに打ち克かって行くのが、プロの道だらう」

幸村は小さくうなずいてから、

「ただ、文彦さんは、プロの画家としてはつきり生きて行くという自覚もないようです」

「それが問題だ。だから、出来がわるいというんだ。社長もやきもきされるわけだ」

幸村は、その森戸の言葉をきき流すように続けた。

「支店長もよく御承知と思いますが、アメリカは何でもプロの国です。プロ意識に徹しなくては生きて行けぬ国とされています」

「そう、その通りだ」

「ところが、このごろでは、むしろ、それと逆に、いわばアンチ・プロとでもいった形で、成功をめざすわけでもなく、のんびり好きなことだけやって行こうという若者も多いんです」

「ベトナム戦争のおかげで、若者が虚無的になったまでだ」

「それもあるでしょうが、わたしには、アメリカが成熟したというか、何だかアメリカ全体がけだるいようなムードの中に漂って、プロとアマの境目のようなところで生きて行こうとし出しているような気がするんです」

「おい、しっかりしてくれよ、きみ。きみらがそんな考え方をしているから、切るべきものがないつまで経^たっても切れん。ハリファックス商事にせよ、アロン農園にせよ、もっとドライに処理できたはずなのに」

幸村は、きき流した。それは、ドライに処理できる、いや、処理していい問題ではなかった。

Q 商事では、リバーサイド市に本社の在るアロン農園から、レモン、グレープフルーツ、オレンジなどを一手に買付けていた。

それも、アロンのフルーツ全体について、無条件一手買取りという好条件を出し、アロンがそれまで取引していたアメリカの大手フルーツ会社との契約を解除させた上でのことであった。

だが、最近、日本市場では、レモンもグレープフルーツも暴落気味。先行きも慢性的な供給過

剰が予想されるとあって、Q商事では、レモンは買付け中止、グレープフルーツとオレンジについては選別買付けを要求することになった。

Q商事側の一方的な都合による契約変更であり、アロン農園が立ち行かなくなるのは目に見えていた。Q商事側では、アロン農園がこのため破綻^{はたん}となれば、それはそれで好都合という冷たい計算である。

アロン側は激怒した。殺気を帯びた交渉にふるえ上って、大久保前支店長はリバーサイド方面へは一切出かけなくなったし、アロン傘下の農民たちが獵銃^{さんかく}を持ってQ商事支店へ押しかけてきたこともあった。

このため、現地支店としては、とてもこの条件をのませることはできないとし、本社に再考を求めているところであった。

一方、ハリファックス商事についても、売り買いのちがいはあるが、似たような苛酷な要求で、相手方を怒らせていた。

二年前、Q商事では、日本のメーカーで開発された自動噴霧器を売りこむにあたり、ハリファックス商事を販売代理店とした。ハリファックスは、ロサンゼルス^{ロサンゼルス}の西約八十キロのオンタリオ市に本社があり、カリフォルニア南部の農業団体に強い会社である。

この自動噴霧器は、予想以上の売行きを示した。

Q商事側では、それを噴霧器の高性能のせいにし、ハリファックス側は、売りこみの努力のせいにした。

いずれにせよ、売れば売れたで、Q商事としては、代理店に渡す口銭まで惜しくなった。

このため、契約更改期を機会に、代理店契約を破棄することにした。

契約は二年毎に更新されることになっているが、背信行為のない限り、更新に応ずることにな

っている。

これについて、Q 商事側では、ハリファックスが、噴霧器も作っているアメリカの農機具メーカーと接触があったことを、背信行為の口実とした。こじつけであり、口実のための口実であった。現地支店としては、これまた交渉しにくい難問であった。

ハリファックス側は、怒るというより、哀訴をくり返す。とくに、ハリファックスでは、販売をコミッション・セールスマンに担当させているため、自動噴霧器を売って生計を立てていた二十人あまりのセールスマンにとっては、会社間の契約破棄は解雇通告そのものであり、このため、彼等が入れ替り立ち替り、Q 商事支店へやってきていた。

裁判所に提訴するという者もあったが、中には、わざと刺青^{いんず}を見せたり、ピストルをちらつかせる者もある。

へそちらが無法なら、こちらも無法で——と、いわんばかりである。

このため、大久保は、とりあえず、あと一期の契約更新を本社に申請していたが、その答えの代りに、大久保は支店長を免ぜられ、森戸がやってきたのであった——。

ふいに、森戸が感情のこもった声をあげた。

「懐かしいなあ。市役所だけは変らんなあ」

車の正面に、特徴のある白い二十八階建のシティ・ホールの建物が浮び上っていた。

「以前、ロサンゼルスにいらっしゃったのですねえ」

と、ふりむく小夜子に、

「もう十五年以上も昔のことですね。それも、ここではなく、サンベルナディオに居たんだが、ときどき、その田舎町からここへ出てきました。そして、あの白い建物を見るたびに、ああロサ

ンゼルスだ、もうここから日本へつながっている、と思ったのですよ」

「御苦労なさったのですねえ」

「まだ外貨が十分じゃありませんでしたからね。皿洗い、芝刈り、オレンジ摘み、スクールボーイと、何でもやりましたよ」

感心する小夜子とは別に、幸村はサンベルナディオという地名をききとがめた。念を押すように、

「サンベルナディオといえば、オンタリオやリバーサイドのすぐ奥にある町ですね」

「うん」

因縁があるというか、へ問題の会社のあるところですね」と、たたみかけたいところであった。その代りに、

「あの辺に知人が居られますか」

「居たって、みんな、おれをいじめた連中さ。どこへ行っても、安い金でこき使われたからなあ」

「……」

「ただ、その中に、一人だけ、おれを可愛がってくれた果樹園主のじいさんが居た。インディアンの血のまじった混血^{ハーフ}だったが、『孫娘を呼び寄せるから、それと結婚し、永住権をとって、果樹園を継いでくれ』といわれた」

「ことわったんですか」

「もちろんだ。地の果てで、うすぼんやりした人生を送りたくはないからな。それに、インディアンと結婚し、ワ、ワ、ワと叫ぶような子供を持つわけにも行かんだろう」

森戸は、西部劇映画のインディアンをまねた声を出し、小夜子を笑わせた。

ただ、幸村は、そうになっていた森戸の姿を想像してみた。